

■シリーズ■ 中学校武道

授業の充実に向けて

175

「今」の時代の武道授業を追い求めて
(柔道・武道授業を通して何を身につけるのか)

④

福島県会津若松市立第四中学校 主幹教諭 稲本重徳

昨年度私は、日本武道館と全日本柔道連盟主催の令和4年度全国柔道指導者研修会（10月14日～16日）に参加させていただきました。さらに今年度はスポーツ庁主催の体育・保健体育指導力向上研修東ブロック（5月24日～26日）に参加し、2回の全国レベルの研修会で競技未経験者の私に柔道授業についての知識がインプットされることになりました。

武道には縁遠かった一体育教師の私が武道授業について綴ることが武道経験の少ない先生方にとって、少しでも自信をもって武道授業に向き合うことにつながれば幸いです。

はじめに

私は昨年度（令和4年度）赴任した中学校で柔道部顧問になり、さらに会津・南会津地区の中体連柔道専門部委員長という立場になりました。しかも当該地区で県大会が開催予定であり、専門部委員長として大会運営を担いました。もちろん県の専門部があり、諸先生方からのサポートを受けながらの大会運営ではありましたが、同

年度の全国中学校体育大会は福島（須賀川市）開催であり、何もわからない私が全国大会の専門部の一員として関わることになり、県大会準備・運営の傍ら、全国大会に向けて事前の会議13回、（全国）大会期間中は7日間大会役員として活動しました。

県の専門部の一員であったこともあり大会後、日本武道館・全日本柔道連盟主催の令和4年度全国柔道指導者研修会（10月14日～16日）に参加しました。さらに本年度はスポーツ庁主催の体育・保健体育指導力向上研修東ブロック

(5月24日～26日)に参加し、2回の全国レベルの研修会で競技未経験の私に柔道授業についての知識がインプットされました。

2

学習指導要領の理解

り、武道が「伝統と文化を尊重し……」と謳う改正教育基本法の教育の目標を実現する役割を担うことになりました。

二つの研修会のキーワードは、学習指導要領を踏まえた武道授業の展開でした。平成18年12月に約60年ぶりに改正された教育基本法では、教育の目標として「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」が新たに規定されました。

その後、平成20年1月の中央教育審議会答申の中で「武道については、その学習を通じて我が国固有の伝統と文化に、より一層触れることができるよう指導の在り方を改善」することが示されました。これを受け、平成20年3月改訂の中学校学習指導要領では武道を含めたすべての領域が必修とな

平成24年度中学校武道授業必修化の目的については「我が国固有の伝統的な文化である武道の普及、世界に生きる日本人の育成、青少年の健全育成を目的に必修化が推し進められてきた歴史がある」とされています。武道授業を語る上では必修化の経緯、学習指導要領の理解は言うまでもなく必須であり、なぜ武道授業が必修化されたのかをよく考える必要があるようです。

3

なぜ授業で武道に取り組むのか

なぜ教育課程に体育・保健体育が存在するのか、なぜ保健体育で武道を取り扱うのか。陸上競技で例に考えてみると、短距離走では決められた自分のレーンの中で隣の選手と競い合うことが前提で、お互いのレーンに侵入することは

ルール違反であり、真つすぐに自分の道を自分の力のみで突き進むことであつたり、走り高跳びでは必ず最後は「失敗」で終わる競技特性ゆえ、自分の限界を知る、成功だけが続くわけではないことを学ぶことなどが体育で陸上競技を取り扱う意味・意義かもしれませんが、もちろん私なりの解釈であり、これが正解とは言えない前提ではあります。

なぜ授業で武道を取り扱うのかについて二つの研修会への参加で得た、私なりの答えの一つは「礼法」の意味を深く理解すること、もう一つは武道を通して合理的な身体操作法(効率的な所作)を嘉納治五郎の説く『精力善用』を体現する動きを身につけることです。授業で学んだ礼法が学校生活、社会生活で他者との調和した関係を築く土台となるのが武道を学ぶ大きな意味・意義であり、無駄のない所作を身につけることが効率的なトレーニングの基礎であるのだと気づかされました。

令和5年度体育・保健体育指導力向上研修の講師としてご教授い

ただいた追手門学院大学の有山篤利先生の研究では、礼法の要点を①他者意識(気配を読む)②効率性の重視(無駄な動きの排除と機能的な動き)③状況に合わせた判断(場面に合わせた柔軟な状況判断)と整理しています。武道に必要な身体操作スキルの育成が礼法を身につけることに直結し、礼の概念を理解する機会となり得るのだと教えていただきました。「礼」は考え方、つまり概念(中国発祥)で、「礼法」は礼の考え方を具体化した所作(動き)日本の創作)という区別です。一般的には両者を曖昧に扱いますが、小笠原流の宗家ははっきり区別されているそうです。

実際の授業での指導場面を例に考えれば、相手を制するために基本姿勢を崩す、崩すために引く・押す・ずらす、相手の崩しをかわす、投げ動作に同調しながらシヨックを回避するために受ける(受け身)、継ぎ足・歩み足で有利な体勢をつくるなど常に相手との駆け引き、同調、調和が柔道の攻防そのものとなります。まさに「柔



写真 教具（新体採用のリングと木製のハンガーを代用して活用）
で転ぶ、転ばされる（会津・南会津地区指導力向上研修会）

よく剛を制す」。相手の力を利用した機能的な動き、場面に合わせた柔軟な状況判断の連続となります。そのためには常に相手の気配を読むことが必要となるのです。後ろ受け身ひとつをとっても自分に作用する力や勢いを感じ取る、方向などを予測する、滑らかに体を傾けるなど、やはり予測・判断・効率的な動きの獲得が要点となります。

また、授業の中でよりわかりやすく同調、調和のこつや勘を習得するためには教具の活用が効果的でした。写真は地区の指導力向上研修会の場面です。柔道授業初心者¹の女性教員も転ぶ、転ばされるこつを容易につかめることに驚きながら楽しまれました。

話しは飛躍しますが、武道の本質を理解し、教育にうまく連携させることができれば、今学校現場で起きている生徒の問題行動や学校課題を縮減させることも可能ではないでしょうか。学校現場での大きな課題であるいじめや不登校の問題は、コロナ禍でさらに浮き彫りになった人との距離感、コミ

ユニケーション能力の低下などが原因の一つであり、これらの問題の解決に「他者意識」「調和」「効率的な所作」を指導できる武道授業が適していると言えるのではないのでしょうか。調和のとれる日本人らしい行動様式、考え方、立ち居振る舞い、これほど本質を教えられる教科、単元は他にはないと言っても過言ではないと考えます。武道授業必修化当初の目的の通り、文化としての武道の普及、世界（グローバル社会）の中の日本人、子どもたちの健全育成にまさにつけてつけの内容であったことに気づかされました。

4
より質の高い授業、
質の高い教育への転換

礼法を単なる「試合前後のお辞儀の仕方」と考えがちですが、有山先生もそれが武道授業の課題だと仰おっしゃっています。「武道のわざを通じて学ぶ、日常の立ち居振る舞いに直結する動き」が、伝統的な行動の仕方の教育であり武道授業

必修化の目的にも繋がっているのだと考えます。試合や乱取りの前に、ちよこんと頭を下げるだけで「礼法」ができたと言うのは、あまりにも伝統的な教育として貧困だと思えます。

目の前の生徒たちを思い浮かべた時に「他者意識」「調和」「効率的な所作」の意味や重要性を理解している者は多いとは言えません。裏を返せばそれらの意味を正確に伝えていく教員も限られているというのではないのでしょうか。授業の前後に挨拶をすることや、部活動で対戦相手や審判の先生方に挨拶をすること（礼法）に対して指導や評価はしてきたものの、「礼」の概念を理解させ調和のとれた人間関係をつくり上げることには重きを置いてきたのかは疑問と言えます。自分自身のこれまでの指導が恥ずかしくなる思いです。

武道で学ぶべきことの本質や授業で武道に取り組む意味を理解して指導を進められれば、より質の高い授業・教育を実現することができるのではないのでしょうか。武道授業で主体的・対話的（調和

的）で深い学びが実現されれば、学校生活で自分も他者も生きやすい状況をつくることができ、ひいては学力・体力の向上にも繋がっていくものと考えます。私のように競技未経験、白帯の体育教師であっても授業を通して武道で学ぶべき本質を伝えようとしたならば、体育教師としての一義的な役割を果たすことができるのではないのでしょうか。実技指導と武道で学ぶべき本質を繋いでいくコーディネートーター、ファシリテーター的役割がわれわれ教員に求められる時代であるとも言えそうです。教員の成り手が減少傾向であることが危惧されている昨今、目の前の子どもたちに質の高い授業、質の高い教育を提供することで子どもたちが教育に興味・関心をもち次世代の教員を志すことにも繋がってほしいものです。

最後になりますが、今後も現場の先生方の研究、ご努力によって授業武道が充実し子どもたちの健全育成に大きな役割を果たすことを期待します。貴重な機会をいただきありがとうございます。

日本武道館の単行本



剣道の文化誌 明治大学教授 長尾 進 著
四六判・上製・480項・定価2,640円

本書では剣道の持つ文化としての多様な面を、時代を追いながら、わかりやすく紹介する。剣道を愛好する方には剣道を改めて見直すきっかけとして、剣道をあまりご存知ない方には剣道という日本文化の成り立ちを知るガイドとして、ぜひ一読を。



剣道 その歴史と技法 埼玉大学名誉教授 大保木輝雄 著
四六判・上製・516項・定価2,640円

本書は戦国末期から江戸時代初期を起点に、今日に至るまでの剣道の歴史的發展の経緯を示した。戦国期以前の剣術の有り様を認識した上で改めて各時代の流れに沿った剣道史を考えてみたいという筆者の思いを実現すべく、連載終了後5年のときを経てついに単行本化。



合気道 その歴史と技法 合気道道主 植芝守央 著
四六判・上製・362項・定価2,640円

世界140の国と地域、国内2,400の道場・団体で愛好される合気道。開祖・植芝盛平翁の生涯、植芝吉祥丸二代道主による普及・振興、さらなる発展に繋げた現道主による取り組み。その歴史の中で培われ伝え続けてこられた合気道の理念、それを体現する稽古法、基本的な技法の解説……合気道の全てを網羅した決定版。



空手道 その歴史と技法 小山正辰・和田光二・嘉手苺徹 著
四六判・上製・548項・定価2,640円

空手は沖縄で発祥し、日本本土に伝承され、今や世界のKARATEとなった。その歴史と技法を、那覇系剛柔流の小山正辰氏、首里系松濤館の和田光二氏、沖縄空手研究の第一人者である嘉手苺徹氏との共同執筆で重層的に紐解く。嘉手苺氏が発見した剛柔流の開祖・宮城長順の最新の事実、小山・和田の両世界チャンピオンのエピソードなども満載。空手の真髄に迫る白眉の一篇。



マンガ・日本武道風土記 漫画家・別府大学客員教授 田代しんたろう 著
B5判・248項・定価1,100円

全国の「武道ゆかりの地」を実際に訪ねて、ペンとスケッチブックを片手に徹底取材。地元関係者や施設の学芸員とのやりとり、その土地の成り立ちをわかりやすくマンガで紹介。多数の資料をもとに丹念に描いた当時の風景も魅力の一つ。マンガの世界で日本各地をめぐって見ては。



死ぬまで弓道 弓道教士七段 小牧佳世 著
四六判・上製・342頁・定価2,640円

競技中に急性大動脈解離に倒れた筆者は奇跡的な生還を果たす。その8か月後に弓道を再開し、わずか2年後に皇后盃で十射皆中、優勝を果たした。本書では激動の自伝を記し、弓のあり方や「早気」など弓道家の誰もが陥る課題などを模索する。死の淵を覗き、現在も全身全霊で弓を引き続ける筆者だからこそ記せた弓道伝記かつエッセイ



学校武道の歴史を辿る 筑波大学名誉教授 藤堂良明 著
四六判・上製・354項・定価2,640円

明治維新を迎え、武術は衰退したが、近代化の過程で武道が「人間形成の道」として学校制度の中に組み込まれ、発展した。太平洋戦争後に武道は全面禁止となるが、それを乗り越え、「格技」として復活。平成24年度には「中学校武道必修化」が実現した。学校武道の歴史を丹念に辿り、今後のあり方を探る。

ご注文・お問い合わせ

(公財)日本武道館 月刊「武道」編集部
〒102-8321 東京都千代田区北の丸公園2-3
TEL 03-3216-5147 FAX 03-3216-5158
<https://www.nipponbudokan.or.jp>

